

奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民投句

一般の部

令和四年九月度 入賞句一覽

投句数 六百四十三句



特選

名和 永山 選

新豆腐手の上で切り妻となる

東京都新宿区 花澤 ちいこ

季語「新豆腐」は、新大豆で作った豆腐で甘い風味がある。妻となり毎日の炊事の様子の中で、やつと手の上で豆腐を切ることにも慣れてきたのである。手の上で豆腐を切ることができるようになった自分に、「妻」であるという実感が湧いたのだろう。下五の「妻となる」と言い切ったことが、妻になった決意の表れでもある。「新豆腐」と「新妻」が私の眼に映し出された。

上るもの無くば地を這ふ牽牛花

養老郡養老町 田中 紫香

季語は「牽牛花」で朝顔のこと。秋の季語である。一般に朝顔は天に向かいどんどん蔓を伸ばす。あいにく這い上がるための支えが無いのだが「無くば地を這ふ」の措辞で生命力をうまく詠いあげている。季語を「朝顔」ではなく「牽牛花」としたこと、また、さらにその力強さを効果的に表すことができた。また、現代を生きる人間への「応援歌」として鑑賞することもできる。先の不透明な世の中であつても、他に生きる道があるということとを教えてくれるのである。

堰落つる音に浸りて端居かな

揖斐郡揖斐川町 栗野 みねお

季語「端居」は夏。室内の暑さから逃れるために縁先へ出て外気に触れること。今年の日本の夏は大変暑かった。暑さから逃れるための縁先に、堰で落ちる水音があつた。たつたそれだけのことだが「音に浸りて」というこの措辞によつて、相当に暑かつたわが身を水音が包み込んでくれたことをうまく表現している。また、下五の「端居かな」の協調で、そこで涼んでいる人影が浮かんでくる。

秀逸

篝火に潜る鶉の背の光りけり

不破郡垂井町 竹嶋 富美子

血管の影の浮きたつ残暑かな

大垣市 藤岡 啓子

風信子ホームルームは自己紹介

京都府宇治市 中嶋 ひろみ

星月夜空深くして広くして

大垣市 田口 貞善

いくつもの噴井に出会ふ水の町

岐阜市 花川 和久

家の鍵探し尽くすや秋の果

岐阜市 林 洋子

土ぼこり上げて夕立の迫り来る

大垣市 官上 美濃留

耽読の目を休めをり水中花

揖斐郡大野町 藤田 涼子

天高し大手を広げ風を呑む

大垣市 百瀬 みゆき

願ひ事多し七夕笹しなふ

大垣市 傍島 豊子

入選

微酔の頬を風撫づ星月夜

大垣市

立川 昌子

七夕や寝坊してもねタケコプター

大垣市

福田 久子

被爆地とつながる黙や蟬時雨

岐阜市

堀江 美州

岐阜提灯の漆ぬる寡黙の背

大垣市

香田 末代

遊具だけぽつんと残る残暑かな

大垣市

北村 陽子

露天湯に零れんばかり星月夜

各務原市

桑原 緑

四つ角の風とぶつかる蜻蛉かな

大垣市

鶴田 信子

ゑのこ草肩よせあへる無縁仏

安八郡輪之内町

野村 照子

豆しぼり小粋にしめて踊の輪

大垣市

早筈 千恵子

秋風の流るる雲や矢の如し

大垣市

樋口 絹子

日盛の差して煌めく腕時計

大垣市

大熊 梓遠

白雲の夏の名残りの水の里

愛知県名古屋市

高岡 美千代

どの音も空へ抜けゆく今朝の秋

愛知県名古屋市

舘野 茂子

引く波の音静かなり夏惜しむ

大垣市

大杉 すみゑ

年重さね歳時記重し子規忌かな

大垣市

平野 きぬよ

小さき風小さく萩を零しけり

兵庫県加古川市

戸田 ミツヨ

露草や犬の鼻先ぬれてをり

養老郡養老町

松永 智志

糸を引き流るる星も瞬く間

福岡県福岡市

大津 英世

水の綺羅揺れて茶店の新豆腐

神奈川県相模原市

中村 光枝

素十忌の茜の空に雲一座

滋賀県大津市

近江 董花

一般の部

選者吟

品書きの紙は真白き走り蕎麦

永山

